OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	脊柱のX線學的研究補遺(椎體高前後比曲線,椎間幅前後比曲線に就て)
Author(s)	淺井, 卓夫
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1951, 11(6), p. 37-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

脊柱のX線學的研究補遺
(椎體高前後比曲線，椎間幅前後比曲線に就て)

Supplement on the Roentgen Research of the spinal Column.
(Comparative Curve on the Height and Dorso-ventro of the Vertebrae Body on the Dorso-ventro Comparative Curve of the Vertebrae Space)

大阪大學醫學部放射線科(指導　西岡時雄教授)
淺井卓夫

本論文の要旨は昭和23年，第7回日本醫學放射線學會に於て演說發表した.

研究目的並に方法

脊柱のあたりに疼痛を訴える患者のX線檢査の場合相當多數の例に於てX線所見陰性である．之に對しては

(1)　骨病變を有するがX線像に認め得る變化を現わさないもの

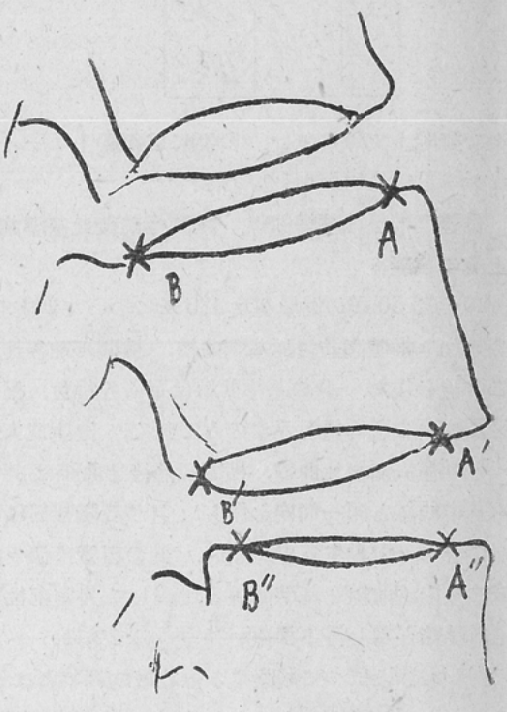
(2)　骨變化を伴わず椎間組織及び脊柱周邊軟部の變化に依るもの

(3)　神經痛性

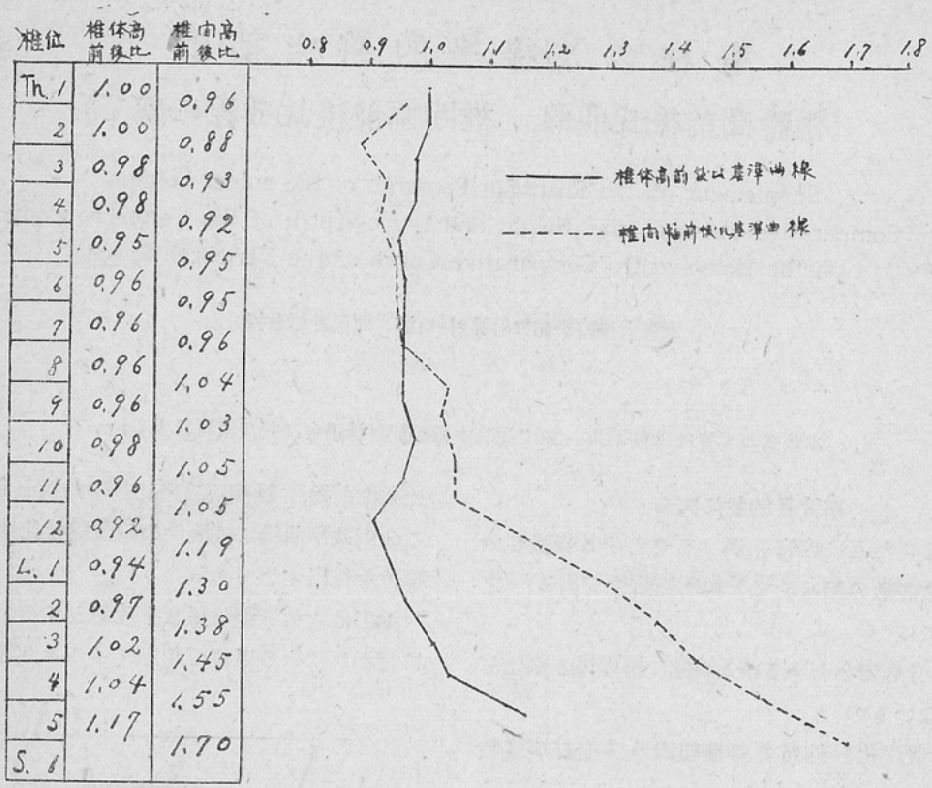
の三者が考えられるが，就中第二のものが重要であることは想像し得るところである．私は之に對し在來行われている椎體個々の觀察に止らず，その相互の關係を精査し，又椎間相互の比較により椎間組織の病變を推測し，特にこれ等を健康者に就ての基準測定値と比較し數量的に表現する事により脊柱疾患に對するX線診斷の可能性を向上せんと企圖した.

方法としては，側面方向撮影X線像につき椎體の前後の上下に計4カ所の測定基準點を定めて椎體の前高，後高を，又椎間の前幅，後幅を計測し，各々前後比をとり，椎體高前後比，椎間幅前後比を求める．(附圖)之を椎位，及び椎間位順に從い圖示して椎體高前後比曲線，椎間幅前後比曲線を得る．又健康成人に於ける各椎位，椎間位についての平均値より同樣の曲線を作り之を椎體高前後比基準曲線，椎間幅前後比基準曲線と命名した．この兩基準曲線に被檢像の兩曲線を比較して異常部位を見出すのである.

撮影は立位遠距離撮影を理想とするが現在一般に行われている臥位で焦點フイルム間隔70乃至90



$\frac{A\,A'}{B\,B'}$……椎體高前後比
$\frac{A'A''}{B'B''}$……椎間幅前後比



椎位	椎体高前後比	椎間高前後比
Th. 1	1.00	0.96
2	1.00	0.88
3	0.98	0.93
4	0.98	0.92
5	0.95	0.95
6	0.96	0.95
7	0.96	0.96
8	0.96	1.04
9	0.96	1.03
10	0.98	1.05
11	0.96	1.05
12	0.92	1.19
L. 1	0.94	1.30
2	0.97	1.38
3	1.02	1.45
4	1.04	1.55
5	1.17	1.70
S. 1		

糧で實際上支障は無い．計測には經驗上「ディバイダー」の使用が便利である．

椎體高前後比基準曲線，椎間幅前後比基準曲線とその意義

20乃至50歳の健康男女130例について測定し，表の如き椎體高前後比基準曲線，椎間幅前後比基準曲線を得た．此の基準曲線は單に各椎位，椎間位に於ける平均値を示すのみで無く，健康成人個々の椎體高前後比曲線，椎間幅前後比曲線は此の兩基準曲線と同一傾向を保ち，且つ各隣接値は相互に著しく變動する事が無い．此の事實に個々の被檢像の兩曲線を基準曲線と比較して異常部位發見の端緒と爲し得る根據が存するのである．

尙お本法に依つて觀察すると比較的高年者は若年者より，又男性は女性より，夫々脊柱前後彎が大きい傾向を示すがその差は著しくは無く，更に前述の如く觀察の要點は曲線の傾向と，隣接値相互間の變動狀態なのであるから此の基準曲線は20乃至50歳の男女を通じて適用してよい．

椎體高前後比曲線，椎間幅前後比曲線の診斷的價値と1新知見

次の「データ」は此の方法による診斷法の價値を指摘するように思われる．即ち一定期間中に脊柱に訴述を有して當科外來を訪れた前記年齡範圍內の全患者(34例)について觀ると次表のようになる．

B群に於て病變部位と曲線異常部位とが一致す

	A., X線像に骨構造の變化を示さないもの	B., X線像に骨構造の變化を示すもの
I.,外診所見と曲線異常部位の一致するもの	7	20
II.,外診所見と曲線異常部位の一致しないもの	7	0
計	14	20

ることは當然期待されることであるが，A群に於ては從來X線檢査で見落されていた所見がとらえられ，しかもその頻度は半數に及んだ．又A群中II項の多くの例は曲線の異常が數椎間に亙つて居り，これは脊柱姿勢の異常を表現している．卽ち比較的輕度又小範圍の脊柱姿勢異常も本法に依り表現せられ得る事が知られる．

以上椎體高前後比曲線，椎間幅前後比曲線による脊柱X線像の診斷，ことに椎間組織變化によると考えられる異常の發見さるる可能性につき概略を述べた．本法によつて得られる諸知見* は次の機會に發表する．

(*其の一部については第14回及び第17回日本醫學放射線學會關西部會に於て演說した．)